

日本生物學會誌

第 13 号



日本生物學會

1982年 10月1日

< も く じ >

第 13 号

澄 田 宏	アナクシマンドロスの生物発生説に関する 若干の考察 (1)	433
高 隆 三	: 残さるべき一つの記録 (その1)	442
奥 野 良 之 助	魚 陸に 上る (10)	445
松 本 郁 夫	生態学者の精神分析	454
小 知 閒 閒	黄 色 い 糸	458
チ ビ	: <書 評> 近ごろ読んだ本	463
会 計 報 告	1981年4月 ~ 1982年3月	466
会 長 へ の 手 紙		467
編 集 局 だ よ り		468

アナクシマンドロスの

生物発生説に関する若干の考察 (1)

澄 田 宏

はじめに

- 1 あてにならない2つの略伝
- 2 生物の発生に関するマンドロ発言の伝承
- 3 「湿ったもの」の取り扱い

はじめに

紀元前570年ころ、小アジア沿岸イオニア地方の都市国家ミレトスの自然哲学者アナクシマンドロス（以下、マンドロ、または万泥子と略記する）に、生物の発生とヒトの始源について発言があったことが、後代の学説誌家たちの証言によって知られている。この証言者たちは、前1～2世紀ころ生きたアエティオスとプルタルコス、そして、2～3世紀ころの人であるヒッポリュトスとケンソリヌス、年代不詳の偽プルタルコスとして伝えられる著者の5人である。かれらが古代学者たちの学説概要を記述したものが、たまたま現存することによって、マンドロの生物観の一端に触れることができるのである。

しかし、各証言とも、マンドロ自身の発言や記述そのものを直接引用しているのではない。また、著者自身がマンドロ原典を側に広げて参照しながら書いたわけでもない。要するに、これらは、マンドロの著作に基づいて書かれた学説概要からの引用と、それを参照して、多少の書き加えや書きかえが行われ、割愛や省略もあった伝承資料である。したがって、いわば間接的なこれらの各証言を合わせても、あるいは存在したかもしれない万泥子の個体ならびに系統発生学的の見解を伝えるには、余りに証拠資料は不十分と言わねばならない。とても、これらの証言からだけでは推測できることはわずかであろう。そのうえ、それらには合致する部分を含む以上に、相互に食い違いや不一致があって、全体で必ずしも協和音を響かせているわけではない。そういうわけで、これらの記録が証言者としての役割を果たしてくれるには、これだけではどうにもならない。

初期ギリシャ哲学史の研究において、始終試みられているピュシス（自然原質）論の再現や再構成の前には、一般に、以上のような資料上の難問が待っている。ほとんど例外はない、と言うことができる。この場合もまた、取り扱う主題のもとに集めてこられた引用句の断片は、伝承されてきた原事実を照明していく上で、余計な影を作ったり、光線に乱れをもたらして、なかなか実像を明らかにしてくれない。しかし、まるで救いがないわけではない。というのは、万泥子には、この生物発生説とは別に、これを包括するより大きなピュシス論があって、その方はさいわいなことに証言となる資料も少なくなく、それら相互間に不一致は少ない。すなわち、資料は相補い、協力的である。そのため、マンドロ学説のうちでもこの部分は、かなり明るい輪郭で描き出すことができる。この万泥子のコスモス形成理論の基本原理の助けを借りて、万泥子の生命および生物世界観の特色を見ようというのが、本稿のねらいである。

1. あてにならない2つの略伝

アナクシマンドロスがどんな人物であったかは、確かなことは判らない。知りたくても確かな資料がないからである。もっとも、確かな資料があったところで、おそらく確かなことは言えないだろうけれども。不確かな資料ではあるが、万泥子の略伝が2つある。それらは、事実と非事実を含んでいる。より正確に言えば、事実についてはそれが事実であることの、また、非事実についてはそれが事実でないことの証拠を挙げるができないから、不確かだと言わなければならないのである。よって、最も正確に言うとするれば、この2略伝によって人物をスケッチすることはできない、と言わざるをえないのである。

しかし、こういうことでは万泥子を架空の人物だと疑う人も出てくるので、現代の研究者たちが実説として一応信用してもよからうという歴史的事実と教説の部分の挙げることはできる。その2略伝を次に示して、信用できると言ってもよからうと思われる部分に、下線を引いておこう。

出典 スタ事典 I, Pp. 178. 1971 (初版 1925)、アダ・アドラー編

プラクシアテスの子で、ミレトスの人である哲学者であるアナクシマンドロスは、タレスと同族であり、かれの弟子で後継者であった。かれは始めて至と分点と時告計を発見し、大地が（天球の）真中心にあることを発見した。かれはグノーモン※を紹介し、そして一般に幾何学の概要を伝えた。かれは、「自然について」、「大地の周線」および「恒星と天球儀について」その他の数著作を著した。

※ 一種の計測定規

出典 デイオゲネス・ラエルティオス II、1-2。

プラクシアデスの子アナクシマン드로スはミレトスの人である。かれは、原理と原素を空気、あるいは水、あるいは何か他のものとして特定しないで、無限定なものであると述べた。そして、部分に変化が起こるのであって、全体は不変であるとも述べた。大地は球の形をして、天球の核心を保っている真中に座していること、月は借り物の光で輝く、つまり太陽から照らされていること、さらに、太陽の大きさは大地と同じくらいであり、これが最も純粋な火であることを述べた。

かれは、クノーモンを最初に考案した人でパポーリノスが著書「雑学録語」の中で述べているように、至と分点の印をつけるために、ラケダイモン（スパルタ）の日時計にこれを取りつけた。かれはまた、時告計も組み立てた。かれは陸地と海洋の周線（地図）も初めて描き、天球儀をも製作した。

かれは、諸教説について解説する摘要を作ったが、それを外でもないアテナイ人のアポロドロスも手に入れたのだと思う。この人は「年代記」の中で、第58オリュンピア祭期第2年※に64歳であり、その後ほどなくして没した、と述べている。したがって、かれはサモス島の僭主ポリュクラテスとはほとんど同じ時代に最盛期であった。かれが歌うのを少年たちが笑った話がある。そこで、これを聞いたかれは、「では、少年たちを喜ばせるために、私は上手に歌うよう工夫しなければならないね」と答えた、ということだ。

もう1人、別のアナクシマンδροスがいる。この人もミレトスの人で、イオニア方言で書いた歴史家である。

※ 西暦紀元前547年

2. 生物の発生に関するマンδρο発言の伝承

資料 1 アエテイオス 学説誌 V 19, 4

万泥子は、最初期の生物は、湿ったものの中に、突起に覆われた外皮に包まれて発生した、と言う。成長すると、かれらはより乾いているところへ上った。それから、外皮が裂けてすっかりはがれ落ちると、かれらはしばらくの間、生きていた。

この伝承は、個体の生命が発生し、成長に伴って環境を選択し、次いでその環境に適応して一生を終るまでの歴史を、マンドロの見解に基づいて誌したものである。これが注目されるのは、(1)それが生命の発祥を含む最初の生物の運命であること、(2)それが奇異な生態をもつこと、(3)あっけない奇妙な終末をもつこと、の3点であろう。このほかに、「最初の」ということばはつかないが、生物の発生について述べた証言には、次の2つがある。

資料 2 ヒッポリュトス 全異教徒ばく論 I 6, 6

生物は、湿ったものから、太陽熱による蒸発によって発生した。ヒトは原初は他の生物、つまり魚に近似していた。

資料 3 ケンソリヌス 降誕日について 4, 7

ミレトスの万泥子には、熱せられた水と土から、魚あるいは魚に最も近似した動物が発生し、かれらの中に人は生成したが、胎児たちは生殖できる時期まで、その内部に引き留められた。それから、やっと魚たちが破裂して、もう自分で生活できる男と女が現われ出た、と考えられたのだ。

資料1と資料2の証言は、生物の発生が「湿ったもの」と関わりがあることを示している。「湿ったものの中に」という表現は、ただ発生の環境を述べただけとも考えられるが、「湿ったものから」の方は、「湿ったもの」が変化して「生きもの」になったことを述べるものであろう。それで、この証言者ヒッポリュトス（以下、ヒッポまたは必掘人と略記する）は、「太陽熱による蒸発によって」と、その変化の原因をあげなければならなかったのかもしれない。同様のことがまた、資料3の「熱せられた」についても言えるだろう。そして、この加熱は資料2で言う太陽熱による蒸発と、たぶん同種のものであるだろう。この証言者ケンソリヌス（以下再出のときは、ケンソまたは犬刷と略記する）は、水と土から、その一度の加熱によるだけで生命が生じた、と考えたとは思われぬからである。この種の加熱が毎日くり返される海のなぎさや、河や沼の岸边など、水と土とが共存して境するところで特に湿気と蒸発が発生しやすいことが留意されているのは、「水と土」の並記から充分うかがえることである。

しかし、太陽熱による蒸発にしる、その種の加熱にしる、後に述べるように、マンドロによれば、それらは自然原質「ピュシス」の推移過程にすぎないのである。だから、マンドロの「湿ったもの」に学説諸家たちが言及する場合、これと相反し対立するものとしての「乾いたもの」の存在や作用は当然の前提となっているわけで、資料2および3で証言者がともに新たに「熱」や「乾」の侵入とその作用を付言したことは、学説紹介の中では蛇足であったとも言えるのである。あえて言えば、この付加は、引用者が断わらなければならないと思っればば行く、あの余計なスキリケット句が本文に紛れこんだとも疑うことができる。余分の説明が割り込むことによって、短い伝承ではかえって、原典がもっていた趣旨がかくれてしまうこともあるであろう。

むしろ、人は逆に、簡約するために最小限度の表現に押さえられ明らかに省略のあることが疑われるような証言の方に、より大きな注意と警戒を向けるべきかもしれない。というのも、そのような証言は、省略という内的緊張によって、報告すべき事柄の骨格を端的に示すことになるからである。資料1はまさにそのようなものと考えることができる。

その証言者アエテイウス（以下、アエテまたは会事と略称する）が述べる句「湿ったもの

中に」の意味するものは、「湿ったものの中に、湿ったものから」生物が発生したことを告げるものではあるだろう。しかし、会亭がそこで、「湿ったものから」と、その素材的原因を述べることをやめて、「湿ったものの中に」と、発生条件としての環境の方を述べたことは重要である。それは、マンドロが生物の発生において、資質という先天的要因よりも環境という後天的要因を重視したということではなく、環境という視点を加えることによって生命の発生と展開をより客観的に考察しようとする意図と態度を示していること、そして、この意図と態度は、時間的系譜的にしか書きようがなかった、これまでの神起原の生成史からの離脱をもたらしたことだ。生態誌を基礎として新しい生命発生説を構成してゆく可能性を、かれは開いたのである。

ところで、資料3が、他の2資料のように「湿ったもの」と言わないで、水と土を挙げたことは、異なるマンドロ伝承と見ることができる。しかし、後述するようにマンドロによれば、水と土は、自然原質から生じる基本的な相反対立物の後から生成してくる、いわば第3世代である。したがって、水と土からの生成は、「湿ったもの」からの生成にくらべれば、1世代遅れて起こるわけである。しかも、水と土が組成された後でもなお「湿ったもの」は新たに生成し、存在することができることを考え合わせると、この伝承はあまり精確な記述を心がけたものではないと考えられる。

しかし今、マンドロの「湿ったもの」が何であったかを知るまえに、この問題に立ち入るとはひかえなければなるまい。ただここで指摘したいことは、ケンソは明瞭に水と土との2品を指したのであって、水からだけではなく、土からも「生きもの」は発生すると受け取っていることである。しかし、それにもかかわらず、マンドロのコスモス形成理論によれば、土は「湿ったもの」からの侵入を受け、それを内に含むことができるから、ケンソの伝承は必ずしも新しいマンドロ解釈を含むとは言えないことである。

さて、次に、最初期の生物がどのような姿形をもっていたか。それを伝える情報は資料1および3にある。その内容はささやかに見えるが、その含意は大きい。

アエテは、その姿形を「突起に覆われた外皮に包まれて」という外観で伝えている。外皮を修飾した語のアカントテスは「トゲの多い」と翻訳されていることが多い。そのため、ウニがトゲによって、クリがイガによって外敵からそれ自身や種子を保護するように、最初の生きものもまた自身を守るためにトゲをもってしただ、という実しやかな珍釈（コーンフォードほか）が生まれてくることになる。ウニにしてもクリにしても、そのトゲやイガは後に獲得した形質ではないか。最初の生きものに危害を加える生きものとして、いったいどんな生きものを想像すればよいのであろうか。

存在しないものに対する不安と恐怖から身を守るために武装するという思想は、限界のないものに対する不安に駆られて、それに目に見える形や規定を与えたり、それを触れることのでき

るものでしか考えることができない思想と親近である。後者はマンドロが非学問的として退けた思想であって、その理論的思考から遠く距たるものであることは言うまでもない。

湿ったものの中で湿ったものから「何か」が生じる場合、(同じものから同じものが分れてくる場合)、必要なことはまず、生じたと言えるためにも「界ができること」である。と私は考える。しきり(ペラス)ができること、これこそ「発生(ゲネシス)」という学術用語にふさわしい出来事はあるまい。そして、界ができるとき、「熱いもの」と「乾いたもの」からの侵入をより多く受けることにより、より多く受けるために適した界面というものが、具体的にどのような形状をとることになるか。それが、突起のあるでこぼこ面であることは、生活上、経験的に充分知られていることであった。

なお、資料3でケンソはこの「トゲの多い外皮」を言う代りに、「魚あるいは魚に最も近似した動物」の姿形を想定する。このいきなり魚の登場をどう理解するかは後に残された問題である。魚あるいは魚類似の生物の発生は、他の伝承においてもそうであるように、それが必ずヒトの始源との関連で語られていることから、これを直ちに原初生物とみなすのではなく、別の解釈から考案されたと見ていくのがよかろう。それはとにかく、ケンソもまた、生物が発生するときには常に何らかの環境を考えずにはいられなかったマンドロの考えを、奇妙な形で伝えていると言うことができる。

3. 「湿ったもの」の取り扱い

それでは、最初の生物がそこから発生したという、この「湿ったもの」とは何なのか。このことばで万泥子が考えたものは何であるのか。

ここで、それは水でありますとか、海にきまっていますとか、沼のことでしょうか、あるいは泥である、いや水蒸気だ、ヌルヌルだ、ドロドロだ、という具体的に「品」を定めてゆく種類の論争を始めることは、どうも適當ではないように思われる。というのも、いまアリストテレスの言に従うとして、万泥子の師のタレスが原理はただ1つある、そしてそれを「水」または「湿ったもの」と言ったときのものとは、呼び名こそ同じでも、その意味は全く異なっているからである。

万泥子の場合、「湿ったもの」は「もの」はものでも、個体として区別されて存在する格や価の定まった品ものとは考えられない。その「湿ったもの」——ヒュグロン——は作用とも言えるし、原因と呼んでもよいし、また性質とみてもよい。とにかく、流通自在で格も価も定まらず、「乾いたもの」との対立関係の中で相対的にのみ存在するという代ものである。

だから、たとえばテオプラストス(以下、再出するときはテオプラ、または手降子と略称する)によって、万泥子ならびにアポロニアのテイオゲネスの意見であることが保証されている、アリストテレスの「気象論」353 b6における陳述や、同書355 a21などを引用したり、

アエテの「学説誌」III、16、1などを参照して、この資料1の「湿ったもの」が、「湿った大地」であるのか、あるいは「乾かされる海」であるのかを、特定の現象の中で指定し、固定することに、はたしてどれほどの意味があるのか疑わしい。というのも、マンドロの学問的関心は、
どんなものであるかを特定することにあつたとは思われぬからである。

しかし、それでは師であるタレスの見解と断絶した異論ではないか。まことにタレスでは、この「湿ったもの」は水の同義語とみなされ、コスモス形成理論を説明してゆくための基本概念であった。それは「1つの原理」の資格をもつものだったのである。ところが、万泥子では、それは「水」ともども原理（アルケー）の王座をすべり落ちて4巨頭の1つにすぎなくなったのだから。しかも、原理が獲得した物質性は再び放棄されようとするのであるから。

わたしは、タレスの主要な功績は、原理は1つだけある、という不動の前提を大胆にも置いたところにあると考えている。その原理に「水」ないし「湿ったもの」を仮定したことは、原因を神々から受動的な自然物へ転換したとして、画期的だとも、革命的だともよく言われるのであるけれども、もっと注意され強調されてよいことは、「それがもし水ならどうなるか」と提起して、「単一原理」の理論化の可能性を試みようとしている点である。

すぐれた水文学者であったタレスが、その陸水・海水について経験豊かな知識から、水や「湿ったもの」によって自然諸現象の不思議を説明することは容易であつたろう。とりわけ、自然活力論から生命論にわたる分野の説明は巧妙を極めることができたろう。しかし、それによって物性一般の整合的配置を説明する宇宙論に成功したとは思われぬ。問題は弟子の万泥子に託されたのである。万泥子がまず始めたのは、用語を厳密に区別して使用することであつた。水と「湿ったもの」を同一視することは思考に無用の混乱をもたらすだけでなく、説明の理論化に有害である。万泥子は「湿ったもの」を水から引き離すことによって「乾いたもの」と向き合う対要素とし、対立関係の中で使う用語として改造した。この過程を見てゆくには、マンドロの抱括的なピュシス（自然原質）論に触れていくことになる。

6世紀の哲学者であり、古代学説誌家であつたシムプリキオスが、アリストテレスの「自然学」のために書いた注釈書の中に、マンドロのピュシス論の概要があるので、これをまず引用しよう。

資料 4 シムプリキオス アリストテレス「自然学」注釈 24,21

かれ（万泥子）が4つの要素の入り混って起こる変化を観察して、それらのうち、どれかある1つを基本とするのではなく、それらの外の別のものを設定するのが相応である、と考えたことはまちがいない。そして、かれは生成を、要素が変化することによってでなく、相反対立するものが恒久運動により分離し出されることによって、示したのである。

資料 5 シムプリキオス 上掲書 150,24

そして、相反対立性をもつものとは、熱いもの、冷いもの、乾いたもの、湿ったもの、等々である。

資料 6 アリストテレス 自然学 187a20

1つのものに含まれている相反対立する性質のものが、その1つのものから分離し出される。

資料 7 シムプリキオス 上掲書 24,13

原理は1つで、動いていて、無限であると主張した人たちのうち、プラクシアテスの子でミレトスの人、タレスの後継者であり弟子である万泥子は、存在するものの原理と要素は「無限定なもの」であると述べたが、この名を原理に始めて用いた人である。かれは、原理は水でもなく、要素と言われているもののどれでもなく、それらとは別の、ある無限の本質であって、それからすべての天体とそこにある世界が生じてくる、と言う。

以上が、マンドロのピュシス論を伝える最も重要な基本資料である。これをもとにして、以下の数節において解釈と補足を加えながら、ピュシス論の概要を描いてゆくことにする。

しかし、その前に、これらの諸資料を取り扱う上で留意すべきことがらに言及しておきたい。

アリストテレスとテオプラストスの資料

資料5と7は、シムプリキオスの名によって伝えられているものの、実は、アリストテレスの僚友テオプラストス（本名はテュルタモス。この名は、アリストテレスが贈った尊称）の「自然学説」からの、そのままの引用であることが明らかにされている。テオプラもアリストテレス（以下、テレスまたは途照子と略称する）もともに、マンドロの著作を実見した上で書いたとみてよいから、その点に信用度を置くとすれば、シムプリキオス自身の叙述とみられる資料4を別にして、これらの証言がもつ確からしさはかなり高いものと言わなければならない。しかし、実際にはそうはならない。引用句の真正度にしても、証言の信用度にしても、引用者または証言者が原著の文脈をどれだけ尊重して、配慮をもって拝借してきたかによって決まることであるからだ。

いま、この場合に限らず一般的に言って、師弟関係というよりは親友関係であつたらしいこの2人が、先行する哲学者たちを引用し紹介する姿勢はだいぶ異なっている。テレスの態度は、自己の学説を体系化する要求があつたために、先行学説に対してはこれを批判検討するに留まらず、都合のよいように再整理し、切り捨て、造り直し、ねじまげ、利用駆使する趣きがある。こ

れに対して、テオブラの方は先人たちの自然学説「ペリ・ピュセオース」を概説紹介するのが目的であったから、その態度には公正さと客観性が求められもし、保たれたであろう。もちろん、そこに問題がないわけではない。典拠にした資料に異本や誤伝がなかったとは保証できないし、引用のつながりや解説の用語に散歩道学派特有のクセのある専門語が現われるからである。しかしテレスに比べれば、その扱いは不満足であるとは言えない。

それだけに、途照子の著作や講義録それに断片までが相当数残っているというのに、手降子のこの書「ピュシカエ・オピオネス」は18巻もありながら、残ったものがわずかであることは、いかにしても残念なことである。その第1巻の主要部分は、シムプリキオスの注釈書の中に200年頃の写本からの借用によって残存し、「感覚論」の1章はそのままそっくり同注釈書に保存されているだけである。

今は、限られたわずかな資料を手がかりに、これを注意深く読むことによるしか、新しい事実の発見は期待されないのである。

(未 完)

残 さ る べ き
一 つ の 記 録 (その1)

高 隆 一

は じ め に

いささか旧聞に属するが、数年前、一地方新聞である「北国新聞」78年6月10日に「教官サヤ当て? カエル昇天」なる珍妙な記事がのった。ある地方国立大学の理学部で、生態学の奥野助教授がヒキカエル調査をしていた「トレンチ溝」が、本人へ通知もないまま、勝手にうめられてしまったという。うめたてを指示したのは同じ生物学科の主任である西田晃二郎教授であるという。事のおこりは「生物学科改革闘争」にある、と報じられていた。私はいささか興味を持ち、知人の野田龍三氏に事情をたずねたところ、「興味があるなら」と数々の資料を見せてくれた。なんとそれは、ダンボール箱数個分であった。数百枚のヒラ、パンフレット、教授文書、ノート類に目を通させてもらい、「これを整理して、公表すべきではないか」とのべたところ、野田氏は「これは当時ともに活動した者たちの共同のものであること。資料は多くの問題を含んでいるので、とりあつかいは慎重でなくてはならないこと」を理由にあげ、消極的であった。

ところで、その資料の中に、76年12月29日付「生物学科教授文書」なるものがあり、そこには「言論は発言者がそれに責任をもつことによって始めて意味をもつのである。発言者の明らかでない言論は流言であり、怪文書にすぎない。言論の責任は、年月が経ったり発言者の勤務先や社会的地位が変わっても、消えてなくなるものではない。…………… 中略 …… この教室で、過去数年間に出版された教授を非難する無数の文書には、そのような意味で責任を明らかにしたものはほとんど全くない。…………… 中略 …………… 10年後に一体だれが責任をとるのだろう」と述べられているのを野田氏に示し、この挑発にどう応えるのかと問うたところ、しぶしぶながらも、対談という形のなら、ということになった。そこで、私と野田氏と、それから討論を深めるために小吉^{トキ}静一(おぎそ・せいいち)に加わってもらい、様々に論じあい、それをここにまとめることにした。しかし、長時間、多岐にわたったものをまとめたものであるから不十分さも多と思う。気づいた点を指適ねがえれば幸いである。

- (たか) : まず、少し全体的なことをうかがっておきましょう。まず、「生物学科改革闘争」ということについて……………
- (のだ) : 「生物学科改革闘争」というのは、新聞による命名で、私たちはそうは呼ばなかった。
- (たか) : それでは何と書いていたのですか。
- (のだ) : 何とも名づけられてはいなかった。たとえば「テーマの自由問題」とか、「生態人事問題」とか、個々の呼び名はあったとしても……………
- (おぎそ) : 1973年3月の「生物学科大学院会活動のまとめ」によると、当時の目標は、「教室の民主的運営」と「テーマの自由」という二点にまとめられていますが……………
- (のだ) : その時点で、自分たちのやってきたことをまとめるとするとその二点になる、となったわけで……………
- (おぎそ) : 色々読んでみて、一つ思うことは、一つ一つのピラはよくわかるけれど、全体として、何を目ざしていたかがよくつかめない。
- (のだ) : ふつうはスローガンをかかけて、それにむかって活動するというのですが、私たちはそうではなかった。その時々で、自分たちが一番大事だと思うことを発言してきたのであって……………
- (たか) : それにしては、発言がたくさんありますね。
- (のだ) : 少し説明がありますが、私たちは、直接自分たちに利益になることは主張しない、という前提がありました。たとえば、奨学金を増額せよ、などということは言わない。もっと根本にせまることをいいつけてきたわけです。当時はいわゆる大学闘争がその頂点から急速におちこみはじめていたころで……………
- (たか) : 当時？
- (のだ) : 生物科の院生会が活動をしたのが70年2月から75年3月までの5年間です。当時のいわゆる「自己否定の論理」とか「大学解体」とかいう流行語は一切つかわない。自分たちが納得できることを自分たちの言葉でいう、ということをやっていた。
- (おぎそ) : 初期のピラには、学生運動用語がないというのはその理由ですか。
- (のだ) : そういうことです。それに、私の思う「運動」というのは、一人の人が加わると全体の質がかわるようなものでなければならない。つまり、一人一人は数ではなく、部分でありながらも全体である、ということです。たとえば、院生会の運動の基本的な性格、骨格をつくったのは K 氏であるし、また運動する側の倫理みたいなものをつくっていったのは、初めは T さんであり、次には O さんであるわけです。T さんや O さんは厳しかったですよ。いかに汚ない相手であれ、こちら側は常にきれいではなくてはならない……………という。
- (たか) : 権力を持つ相手とたたかうのに、それでは勝てないでしょう。
- (のだ) : いや、こちら側が常にその辺の検討をせまられていたからこそ、5年もつけられた

ということだと思います。その Tさんが、「闘争」ということばは使うな、「団交」というのもいけない、「活動」であり、「話しあい」だと。

(たか) : でも、内質はやはり「闘争」であり、「団交」だったのでしょう。

(のだ) : ええ、言葉の上でのいせいのよさよりも、その内質が問題なのだと。あたりまえのことかもしれませんが、現実にはあたりまえとして実現している団体なんてほとんどないでしょう？

(たか) : では、そのなかみの話をうかがいましょうか。 (つづく)

(1982年6月30日 収録)

÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷÷

(後記) : テープからおこしたものを高氏からみせていただいたが、あまりのできの悪さがっかりしている。とはいえ、おしまずつきあっていただいた高氏と小吉~~氏~~氏にもうしわけないので、そのままとした。かつて、ともに活動した仲間たち、諒とされよ。 (野田)

— 魚 から 人 間 ま で の 歴 史 —

奥野良之助

第 2 章 あらかじめ心得おくべき若干の知識 (続)

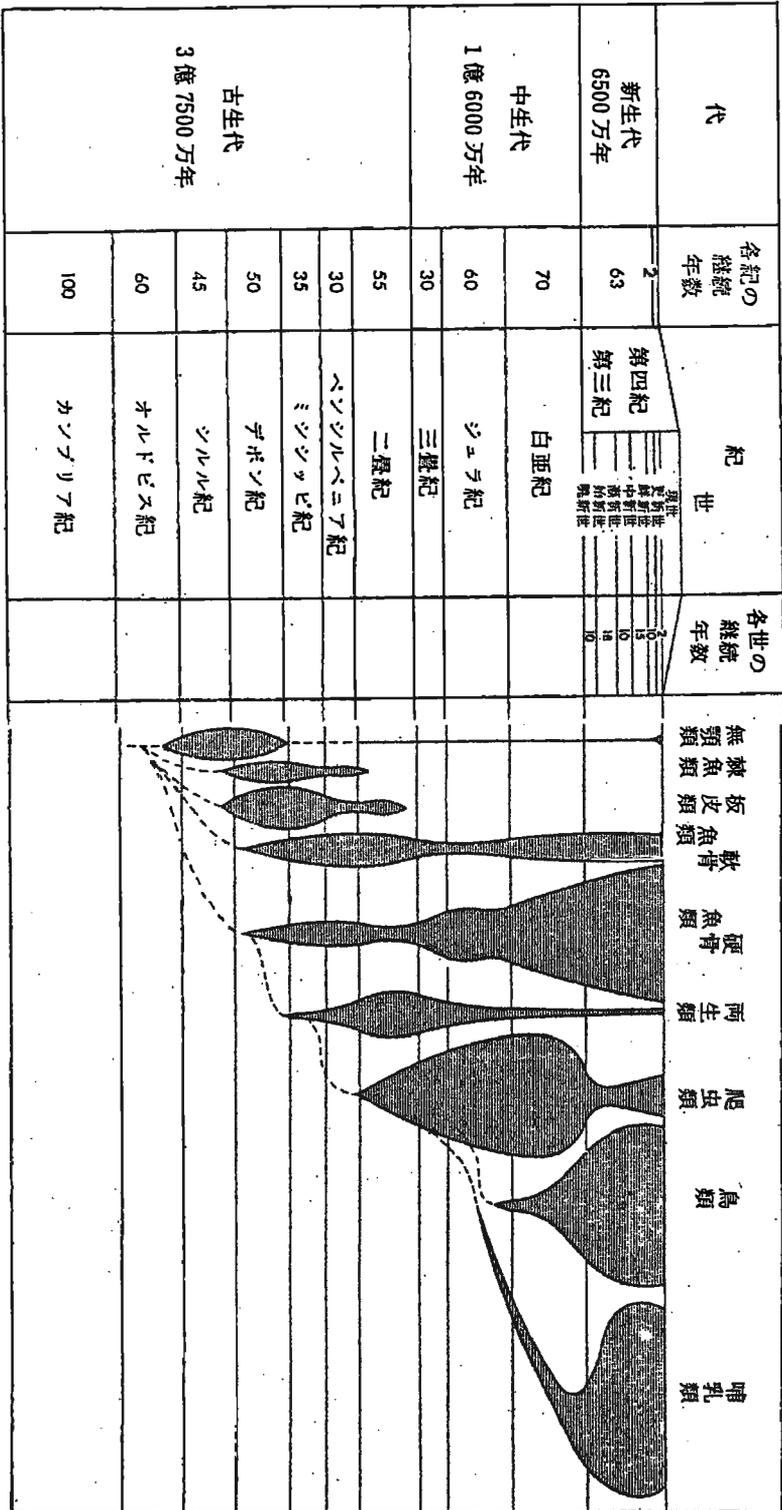
6 地質年代 (続)

さて、話は地質年代のことであった。地球が生まれて45億年、ホントかウソか知らないけど、その始めの20億年くらいは、生物はいなかったことになってる。その後また20億年、生物は起原したことは起原したが、バクテリアとかアメーバとか、いるのかいないのか定かにはわからないケチなものばかりで、もちろん化石にもほとんど残らず、さっぱりはっきりしない。もっとも、最近は科学の進歩とやらで、残るはずのない化石を見つけたりして、原生代とか始生代とか地質年代を増やしているが、私は信用しないことにしている。なぜとって、もし信用したら、原生代やら始生代まで、勉強しなければならなくなるではないか。幸いにして、といっても始めからそのつもりだったのだが、本論文の範囲は「魚から人間まで」に限定されている。魚は原生代や始生代にはいない。魚の起原は、その次の古生代オルドヴィシス紀、せいぜいさかのほってもその前のカンブリア紀である。だから、地質年代もわずか6億年、古生代まででよろしい。

もっとも、学者はどの分野にもたくさんいて、しかもああ言えばこううといいた人が多いから、すべての学者の意見が一致していることなど、本来ありえない。だから、地質年代表もたくさんある。こういうときはどうするかというと、だれか1人の説を、だれの説であると断っておいて、そのまま利用するのである。それがまちがっていても、その責任は「だれか」にある。ここでは、コルバート著「せきつい動物の進化」第3版(田偶本生訳)から、丸ごといただいておくことにしよう。その年代が正しいかどうか、責任は挙げてコルバートにある。(次ページ)

図をかかけてほっておいてもいいのだが、そうすれば39人中38人までは、ろくに図を見もしないということも、私は知っている。そこで、少し説明を加えることにしよう。

いまを去る6億年の昔、海の中に突然、大きなさまざまな生き物が出現した。すでにのべたように、それまでも生物はいたのだが、小さいものばかりであった。それがこの時、急に分化し大きくなったわけは、例によってよくわからない。とにかく、そうなったのである。現在海にすんでいる無せきつい動物のほとんどすべてが、先祖形ではあるが生まれてきたというのだからすさまじい。そこで、この時点を「古生代」のはじまりとする。そして以後6億年間を3つに分け「中生代」「新生代」と呼ぶことになっている。6億年のうち、古生代は4億年足らず(3億7



500万年：こんなこまかな数字は、あまり信用したり憶えたり、しない方が賢い)を占め、中生代が1億6000万年、そして新生代が7000万年弱といちばん短い。人間の歴史も、古代、中世、近代と3つに大別することになっているが、年代の長さは少々ちがっているけれども考え方は似たものである。

ところで、たとえば明治維新という出来事によって日本の近代化が成り、その功罪は別として、というのは、ここでそれを問題にすると、“進出”か“侵略”かを決めんならんことになって、ひとつまちがえば国際問題になりかねず、日本生物学会存続の危機におち入るおそれがあるからであるが、ともかくそこで、日本の社会体制が変わったことはたしかである。そこで、江戸時代から明治時代へと、“時代”が変わることになる。ついでにいうと、明治時代から大正時代、さらに昭和時代への移り行きは、全く異なった観念によっている。明治—大正—昭和は、単に天皇がお崩れあそばしたことによって移るからである。天皇が昇天した、というのはちょっと変な言い方だけど、だけで、地上の社会体制が変わるわけではない。明治以後は近代日本としてひと続きの時代である。本当をいうと、昭和20年8月15日をもって、もう1度時代が変わってもよかったし、変わったと思ったし、変わる条件はあったし、変わってほしかったのだが、遂に変わらなかったようではある。

それでは、地質時代の歴史では、何をもって“代”を区分するのであろうか。それは大規模な造山運動による、と私の習った古い地質学では述べている。チビ氏が「書評」で書いているように、最近「プレート・テクトニクス説」なるものが出てきて、一度否定したはずのウエーゲナーの大陸移動説が再評価されている。したがって、造山運動もまた、この新学説によって再検討されているにちがいないが、ちっとも勉強してないから、ここに書くわけにはいかない。まあ、インド亜大陸は昔、南極大陸とくっついていたのだが、プレートに載っかって北上し、ユーラシア大陸にぶつかって、ヒマラヤ山脈がまくれ上った、くらいなことは知っている。ともかくにも、その原因はともかくとして、古生代以来地球は3回の大きな造山運動に悩まされた。古い方から、カレドニア造山運動(4億年前)、パリスカン造山運動(2億年前)、アルプス造山運動(7000万年前)である。現在の高い山々、アルプス・ヒマラヤ・ロッキー・アンデスなどなどは、すべてアルプス造山運動でできたというのだから、相当な“天変地異”と言えよう。

こうした高い山脈が連なると、大気の動きが変わり、気象が大きく変動する。それは当然、そこにすむ動植物にも影響し、生物相もまた大きく変化する。というようには、本当は簡単にいかないのだが、それはまたあとで、中生代末期の恐龍の絶滅とからめて、くわしく述べることにしておこう。

古生代から中生代への移行には、パリスカン造山運動があげられる。中生代—新生代の移行はアルプス造山運動である。ところが、いちばん古いカレドニア造山運動は、“代”の交代をあげてはめてもらっていない。これは、平等主義にもとる差別・選別思想の現われであるが、どうしてこんなことになっているのか、不幸にして私は知らない。

ところで、この3つの時代区分にそれぞれせきつい動物のグループをあてはめると、大体次のようになる。

古 生 代 : 前半は魚、後半は両生類
中 生 代 : いわずと知れた 虫類、つまり恐龍
新 生 代 : 鳥類とほ乳類

こうしてみると、魚が陸に上って両生類となった古生代の中ごろを境にして、“代”をひとつ交代してもよいように思える。ちょうどパリスカン造山運動もある。長すぎる古生代を半分にちぎっておけば、各“代”の継続年数も同じくらいになってちょうどよい。と私は思うのだが、すでに述べたとおり、代は3つと決まっているので、やむをえない。

これくらいの知識ですませておけばいいものを、学者がよってたかって調べるものだから、こんなおおまかな時代区分では話ができなくなった。とくに、好むと好まざるとにかかわらず、せきつい動物の歴史の正確にして詳細な知識を与えずにはおかぬ熱意に燃えている私としては、どうしてもここで、よりこまかな時代区分のことも、知っておいてもらわないと、今後の叙述に支障が生ずる。

さて、“代”をさらに分けたものが“紀”である。紀は、古生代に6つ（もしくは7つ）、中生代に3つ、新生代に2つ、合計11（もしくは12）ある。古生代の紀から説明しよう。

古生代のいちばん最初のころをカンブリア紀という。漢字で書けば寒武紀である。といって別に寒かったわけではない。この紀は大変長くて、1億年も続いたことになっている。新生“代”よりも長い。もっとも、この紀は本論文とはあまり関係がない。なんとなれば、まだせきつい動物がいなかったからである。より正確にいうと、せきつい動物の化石がみつかっていない時代である。したがって皆さんは憶えなくともよろしい。

2つ目のオールドウ”イス紀は、せきつい動物が起原したといわれている時代であり、大変重要はずのところ、これもまたあまり話すことがない。何とならば、この時代から出てくる化石は、魚といっても実はそれらしきウロコだけであって、どんな形のものが泳いでいたのやら、何にもわかっていないからである。せきつい動物の起原に就いても、起原の化石がとれたわけじゃなし、いやオレは、カンブリア紀に起原したと信じる、といってがんばれば、それを否定できる学者はいない。といって、がんばってみたところで大したことはない。まあ、学問などというものは、その程度の方がよい。かのアインシュタインは、 $E = mc^2$ などということを見つけたばかりに、広島・長崎の原爆投下を聞いてショックを受け、科学を捨てたといわれる。

せきつい動物が初めてにぎわいを見せるのは、その次のシルリア紀（あるいはシルル紀）である。魚の形をした水中性の生き物であるが、彼らにはアゴがなく、頭に固い甲をかぶっていた。そこでこれらを「かっちゅう魚」という。なぜ甲をかぶり、アゴがなかったかについては、いろいろ

と面白い話があるのだが、それはまた後にゆずる。

次いで時代はデウ"オン紀に移る。漢字名は泥盆紀であり、単なるあて字であるが、この時代は、本論文の最初に書いたように、乾季と雨季とが交代にやってきて、湖や池が干上り、泥々のお盆みたいになった時代だから、泥盆紀とはまさに言い得て妙である。この紀だけ、今後は漢字名でいくことにしよう。さて、この紀は、魚が上陸して両生類となった記念すべき時代である。といっても、上陸はその末期であって、この時代の大部分は陸上にせきつい動物はおらず、魚しかいなかった。そのかわり、魚に関しては何でもいた。アゴのないかっちゅう魚、初めてアゴをつくった板皮魚、さらに進化した軟骨魚（サメの類）と硬骨魚（ふつうの魚）の4つである。これが、水中性のせきつい動物、つまり魚のすべてであって、そのすべてがこの時代にはそろっていた。もちろん、種類数からいえば現在の方がずっと多いが、現在の水中には板皮魚がいない。そこで、泥盆紀のことを「魚の黄金時代」ともいう。

コルバート先生の地質年代表では、その次はミシシッピ紀とペンシルウ"アニア紀になっている。そして、どこをさがしても、有名な石炭紀がない。もともとこういった時代の地質は、主としてイギリスの学者が調べていた。そして、たとえばデウ"オンシャーで初めてみつけたからデウ"オン紀といった風に名づけられている。石炭紀はいうまでもなく、イギリスの世界帝国を支えた石炭ができた時代であった。ところが、アメリカで調べると、この石炭紀の地層が前期と後期にはっきり分けられる。そこでアメリカの学者は、前期をミシシッピ紀、後期をペンシルウ"アニア紀と名づけて区別した。おそらく、それぞれの州で、それぞれの地層がみつかったのであろう。この結果、唯緒正しい石炭紀がなくなってしまったのである。面白いことに、イギリス系の学者はいまでも石炭紀を使っている。私も石炭紀を使うことにする。別に、アメリカ帝国主義を批判して、イギリス帝国主義に肩入れするわけではない。時代の数など、少ないに越したことはないではないか。

この石炭紀、つまりミシシッピ紀とペンシルウ"アニア紀は、陸上で大いに植物が繁茂した時代であり、初めて大きな森林が発達した。といっても、今のような樹木ではなく、トクサやシダの類が馬鹿でかくなったものであったが。そして、こん虫類も大発展し、翼開長1メートル近いお化けのようなトンボが飛んでいた。気候は湿潤で、森のあちこちに河や沼があり、生まれたばかりの両生類は、このめぐまれた環境で大いに発展する。とにかく、水はあり、餌はあり、そして敵になるべき他のせきつい動物はいなかったからである。もっとも、小さい両生類はお化けトンボにつかまされたかも知れない。ただ、彼らは「鬼子」もつくってしまった。は虫類である。

この鬼子が次第に力をたくわえ、両生類を圧迫しはじめるのが、古生代の最後の二畳紀（ペルム紀）である。この紀のおわりごろ、勝敗は明らかとなり、両生類は没落し、は虫類は興隆する。そして古生代は終る。

次の中生代は、古い方から三畳紀、ジュラ紀、白亜紀と、わずか3つに分けてあるだけだか

ら憶えやすくていい。いうまでもなく、は虫類、すなわち恐龍の全盛時代である。

中生代は三畳紀（トリアス紀）ではじまる。その前の二畳紀に両生類を圧倒したのは虫類は、この時代に地位を固め、次のジュラ紀と白亜紀にかけて大いに繁栄する。そして白亜紀末、壮大に減びていく。いわゆる恐龍の滅亡である。

鳥類とは哺乳類とは、いずれもジュラ紀に起原したことになっている。鳥は起原してまもなく発展しはじめ、白亜紀には早くも、現生の鳥の大部分が出現した。だから、ゴジラの頭にスズメが止っていたかも知れない。そんな絵は見たことないが。しかし、鳥たちが恐龍の滅亡を“高見”の見物していたことはまちがいない。一方、哺乳類の方は、どういうわけかほとんど進歩しなかった。中生代のおわりになっても、たいていものはネズミ大、最も大きいものでせいぜいネコくらいというから、巨大な恐龍にくらべるとあまりにも貧弱といわざるをえない。その恐龍が減び、新生代がはじまって、ようやく哺乳類の時代となるのである。

新生代はわずか6500万年、たった2つの紀、第3紀と第4紀、に分けられているだけである。第1紀と第2紀がなくて、いきなり第3紀からはじまるというのは、1階と2階のない3階建ての建物みたいなもので、変なことは確かである。といて、いくら考えてもその理由などわからないであろう。その昔、地球の年令がいまよりもずっと短かかったころ、正確にいうと、短いと考えられていたころ、地質年代は、第1紀、第2紀、第3紀の3つにわけられていた。研究が進み、地球の年令が古くなり、こまかな地層が区分されて、正確にそうだというわけではないがおよそのところ、第1・2紀は古生代・中生代となった。そして第3紀だけが、新生代のよりこまかな時代区分として残ったというわけである。

第3紀は、新生代6500万年のうち6300万年を占める。残りのたった200万年くらい、わざわざ第4紀などと区別しなくともよさそうなのであるが、実はこの200万年は、ただの200万年ではない。この間、地球は4回の氷河期におそわれた。気温が低下し、降った雨がみんな氷になって地上に積ると、海の水が減ってしまう。海が遠くの方へ退いていくから、これを海退現象という。理屈も計算も合っているが、私は長い間、そんなこと信じなかった。いくらたくさん氷が積もったといっても、あの広い海の水が100メートルも下がるわけではない。ところが2～3年前、金沢に大雪が降って、家の軒まで積もったことがある。そのとき、なるほどこれでは海の水が減るのも無理はない、と初めて感じた。理屈からいっても計算してみても、金沢に3メートルほど雪が積もったからといって海の水が目立って減るわけではないのだが、とにかくそう思ってしまったのだから仕方がない。気温が上昇すると、今度は陸上の氷が解けて、海の水位が上がる。これを海進という。100メートルも上がるのだから大洪水である。最後のウルム氷期は、今からわずか1万年前に終わった。その海進の記憶が人間に残り、世界各地に洪水伝説が伝えられることになる。ノアの洪水もそのひとつだが、南太平洋の島々にはもっと面白い話が伝わっている。それは、何でも海の中に巨大なカエルが住んでいて、水をどんどん飲むものだ

から、みんな困ってしまった。島にいて海の水が減れば、土地がふえて喜ばなければならぬはずだが、そう思うのは、土地を金もうけの対象としか見ない、墮落した考えのせいらしい。海に生きる海洋民族は、海が減れば困るのである。そこでみんなて相談し、このカエルを笑わすことにした。企ては成功し、カエルは大いに笑ったのだけれど、あまり笑いすぎて水をみんな吐き出したものだから、大洪水がおこったという話である。いくら海に生きる海洋民族とはいえ、島がなくなるとはやはり困ったことだろう。氷期が来て寒さにふるえ上り、間氷期には洪水から逃げまわっているうちに、人間はきたえられて次第にかしくなった。つまり第4期200万年というのは、人類進化の時代として区分されているのである。10数年前のホルバートの初版では、第4紀は100万年になっていた。人間の先祖の化石の研究が進んで、時代がだんだんさかのぼっていったものだから、第3版では200万年に伸ばされた。5版になれば300万年くらいになっているかも知れない。

さて、歴史というものは一般に、古くなるほどよくわからなくなり、新しいほどこまかなところまで調べることができる。新生代はいちばん新しい時代だからいちばんよくわかっていて、第3紀というだけでは時代区分が十分ではなくなった。そこでこれを5つの“世”に分つことになっている。古い方から、ぎょう新世、始新世、漸新世、中新世、鮮新世である。“始”新世が2つ目にきているというのは、どう考えてみても不合理であるが、これもまた歴史がからんでいる。新世代の地層をはじめに調べた人が、これぞ新世代のはじまり、つまり白亜紀に続く部分、と思って名づけたのが始新世であった。ところがのちにいろいろ調べると、その間に実はもうひとつ、地層があることがわかったのである。はじめの前は何だろうと、おそらくその人は哲学的に苦悩したにちがいない。結局、夜明けの前はあけほのだから、ぎょう新世（ぎょうとはあけほを意味する漢字なのだが、残念なことに我がタイプに活字がない）などとこじつけたというわけである。5つの世のうち、始新世と中新世がやや長く、それぞれ1800万年と1500万年、あと3つは1000万年づつである。第4紀は更新世と現世の2つにわけられる。人類の進化ではもっとこまかく分けられているが、定かには知らないで、ここには書かない。

白亜紀の終りに、どういうわけか巨大な恐龍がいっせいに滅びる。そのあとを受けつぐはずの哺乳類は、そのときだいたいネズミくらい、当時の支配者恐龍が急にいなくなって、相当面くらったにちがいない。地球の上には、ぽっかりと大きな穴が生じた。この“帝国の遺産”をめぐって、哺乳類は発展をはじめののだが、もうひとつ、この遺産をねらっていたものがいた。それは、白亜紀の間にすでに充分に分化し発展していた鳥類である。彼らは空から空いた地上に舞い降り、巨大化して地上をのし歩き、まだ小さかった哺乳類をその太い足でけとばした。いまに残るアフリカのダチョウ、オーストラリアのヒクイドリとエミュウ、南アメリカのレア（アメリカダチョウ）は、その生き残りである。ダチョウは今でも、ライオンをけり殺すことがあると、ずい分昔にだれかに聞いたことがあって、そういう話は大好きだからいまでも信用してあちこちで

言いふらしているのだが、その真相はいまだによくわからないのだけれど、ダチョウよりもっと大きかった当時の地上性の鳥には、まだ小さく弱かったホ乳類も相当でこずったことであろう。しかし、鳥とホ乳類とでは、頭の出来がちがっていて、この勝負はやがてホ乳類のものとなる。鳥は再び空中に追いやられ、地上の恐龍帝国の遺産は、ホ乳類が継承することになるのである。

始新世になると、ホ乳類は大いに発展をはじめ。中新世に新旧ホ乳類の交代という事件はあったが、結局現在にいたるまで、一貫して繁栄をつづけているわけである。

以上が地質年代と、せきつい動物栄古盛衰のあらましである。このように、ことこまかに説明したところで、地質年代表が読者のすべての頭の中にインプリントされたと思うほど、私は甘くはない。何となれば、ここ10年、毎年「せきつい動物系統学」の講義をしている私でさえ、いまだにときどきあやしくなって、始新世の次は何新世だったか知らんと、あわててノートを見なおす、なんてことをやってるからである。しかし、ここまで説明した以上、地質年代表が頭にはいらぬのは、私の責任ではなく、読者の責任である。今後は情容赦なく、泥盆紀だのシルリア紀だの、断りもなく使用するつもりであるから、左様心得られたい。

ところで、これまで何千万年とか何億年とか、こともなげに使ってきたが、本当はこれは大変な年数である。数字の上ではわかって、実感としてはとらえられるものではない。かつて水族館にいたころ、「うみと水ぞく」なるパンフレットをつくった。その第1巻第1号で、水族館の電話番号をミスプリントし、全部手でなおされたことがある。10や20は何でもない。数百くらいまでは、何と自分がなおしているのだという気持ちもてた。ところが千を越すと、機械になったような気がした。機械にならない　られなかった、と言った方がいいかもしれない。その時、人間にとって実感としてとらえうる数は、せいぜい数百どまりでないかと思ったわけである。それ以上は、たくさん、であって、数ではない。私はいま51才だから、50年くらいは実感としてわかる。20才の青年にはわかるまい。まあ、人間には理性なるものがあるらしいから、それを働かすと、100年くらいはわかるかも知れない。「江戸時代の飢きん」なる論文を本誌12号に寄稿した佐道先生があるとき、「ワシは、屋久島の杉とエジプトのピラミッドの2つを見てみたい」と私に言った。とり合わせがあまりにも奇妙なので、「なんでや」ときき返したら、「両方とも、4000年経ってるやろ」とのことであった。1つは自然、1つは人工だが、両方をじっくりながめたら、4000年が実感できそうだと、ということらしい。4000年ですら、かくのごとく手間がかかる。4億年など実感の仕様がなぬのだが、その片りんでも感じてもらうために、次のようなたとえは如何であろうか。

いま、せきつい動物5億年の歴史を、全10巻の本に書くことにしよう。ふつう歴史の本は、くわしくわかっているところは長く、わからぬところはとぼして書くことになっている。でもそれは、過去の時間に対する差別だから、この本では時間を正確に平等に、ページにふり分けていくことにする。第1巻へき頭に、せきつい動物ができたことにして、この巻に書けることは、魚

のものらしいウロコの破片がいくつかだけである。第2巻になって、アゴのない魚、甲皮魚類の全身がやっと現われる。この巻のハイライトはアゴの出現だが、大して何もわかっていないから書くことは少ない。第3巻は泥盆紀で、さまざまな魚の記載と、「魚 陸に 上る」という大事件が、その巻末に来る。第4～5巻は両生類、そして6、7、8、9巻までがハ虫類の記事である。ホ乳類は9巻の終りごろにようやく発展をはじめ、10巻全てを通じて活躍する。

ところで、我々の実感できる人間の歴史は、この本の中ではどうなっているのだろうか。1巻5000万年、500ページだてとすると、1ページ10万年。ピテカントロプスは30万年前だから、第10巻498ページ、我々と同じホモ・サピエンスであるクロマニヨン人は最終500ページのちょうど真中あたりに出てくる。1ページに50行つめこむと、1行2000年だから、ピラミッド以来の人類の歴史は、わずか2行で書かなくてはならぬ。

このたとえば、オーバーリン：石本 真 訳「生 命」岩波書店 に出ているものの盗作である。ただし、オーバーリンは地球の歴史50億年にあてはめていたのだが、ここでは5億年にちじめて盗んだ。こんなたとえば、5億年が実感できるとは思えないが、言わないより言う方が少しはましだろう。再軍備・軍国主義化反対も、ムダとわかってもやはり言った方がよい。ムダは馬鹿には出来ない。何となれば、現代日本の経済繁栄はムダによって成り立っているからである。ムダをぬきとられた日本経済は、ホコリを吸いとられた大学教官と同じで、たちまち自壊してしまう。もっとムダを尊敬しよう。

生態学者の精神分析

松本 郁夫

人間という生き物は、何かしらの価値体系に自分の存在を位置づけなくては生きてゆけないものらしい。どんなレベルの学校でどれくらいの成績をおさめている学生であるかとか、いくら資本金による会社でどんな地位にあるサラリーマンであるかとか、どれくらいの出来の息子とどれくらいのかせぎのある夫をもった主婦であるかなどが、その最も一般的な例であろう。そして各人の信じる価値体系の中で自分がどの位置を占めるかという認識によって、満足したり不満をもったりしながらも、なんとか自己の安定を保っていると言えるのではないだろうか。

しかし、そうしたもろもろの価値体系や、その中で自分がある位置を占めるという認識は、何ら確固とした基盤のあるものではなく、言ってしまうと幻想にすぎないのである。(大日本帝国における強大な価値体系が、1日にしてくずれさったことを思いおこしていただきたい。) ただそれが確かなものに見えるとすれば、その価値体系が多くの人に共有され、その地位を多くの人が認めるからであり、たとえば日本生態学会の方が日本生物学会よりも権威があるとされるのも、前者の価値を信じる人の方が後者よりも多いからというただそれだけのことにすぎない。したがって、この本来何の現実的基盤もない価値体系において自己を安定させようと思えば、なるだけ多数の認める価値体系の中に自分を押し込むか、それとも自分の価値体系を多数の人間に認めさせる必要があるわけである。そのどちらもできない人は、マイナーな価値体系に身をおいて自己の不安定に耐えなければならない。それもできなければ、自分だけの価値体系を絶対と信じ、それが否定されないように他との接触を断つよりないわけで、こうなるとたいていは世間から狂人といわれる。

また逆にいえば、不安に耐えられるしっかりした自我をもった人は、しいて多数に身をおかなくてもやっていけるから、比較的自由にいられる。それに対して不安定に耐えられない人間は自分をゆがめても多数に追随するか、自分の価値体系を認めさせようという努力をしなければならぬ。どちらにしても本人にとってしんどいことだし、後者の場合は迷惑な存在でもある。とくに、メジャーな価値体系に身を置きながら、まだ安心できないでもっと認めろと強要する人というのは、力があるだけにその害は大きい。

さて、前おきが長くなったが、今や生態学界の指導的地位に立つ伊藤嘉昭氏が雑誌「科学」

(岩波)の7月号(1982)に「生態学に必要なものは<対話>か? 否!」という一文をのせているので、そこから引用しつつ氏の無意識をさぐってみたいというのが本題である。

まず前書きで次のように述べている。

なにしろいつも筆には必ず三つが四つの英文原稿と、一つか二つの学会誌からレフエリ一を頼まれた原稿とが入っていて、列車に乗っている時間といえこれらの校訂の時間にほかならず、そのあいだに自分の原著論文をなんとか年3編ぐらいいは書き続けようとし、その合間をぬって自分の野外調査を絶やさずにきた人間にとっては、なんとも時間が惜しいのである。しかし、おそらく他の生態学者(もちろん自ら真剣に研究し論文を書いている学者のことだが)もそう思って批判を放棄するであろう。そうなると、生化学や発生学の人たちに「みろよ、生態学者なんてこんな程度のものさ」といわれる(じつはいままでいわれてき、その原因の一部は彼らの誤解であろうが、少なくとも他の一部は生態学者の怠慢によると思う)であろう——こう考えて、迷った末に書くことにしたのがこの文章である。

まず気の付くのは、時間を惜しむ理由の述べ方がやけに念入りなことである。自分がどれだけ忙しいかを強調するというのは、自分の努力が十分に評価されていないという強い不満の現れと解釈できる。さらに言えば、これだけ忙しくしているんだと言いつけさせることで、自分は確かな地位にあることを確認しているとも受けとれる。それにしても原著論文を書く合間をぬって野外調査をするというのは順序が逆のような気がしますが、氏の本音がよく出ています。最後の余り時間で行なった調査によって年3編の論文(4ヶ月に1編!)を書くのでは、内容の方はどうなっているのやら。

次に生化学や発生学(いわゆる物理化学的方法の使えるより近代科学として認められた生物学の分野)に対する強いコンプレックスがうかがえる。それはさらに本文で次のように述べていることから明らかである。

日本の生態学の地位は英語圏やスカンジナビアとくらべて実に低い(「生物学の中心は分子生物学である」という記述に、何冊の生物学書で出会うことだろう。民衆はそれ以外のものも真剣に求めているのに)。この原因の一つは生態学者自身があまりにも不勉強で、論文の発表数にしても、大学の教官の学位取得率にしても、外国留学にしても、そしてまた、一人の責任で書かれた日本語の生態学教科書や解説書が実に少ないことにしても、生物学の他分野とくらべてあまりにも見劣りがすることにある。それは、大学教官の公募(残念ながら最近公募とはいえぬようなものが多いが)をみるとわかる。動物生態学の助手ポストの公募のさいの応募者は博士号をもたぬものが大部分であったりして、それらの人は「OD」数年で論文もロクにない。動物生理系の助手公募のときには

国際雑誌にいくつもの論文を発表した博士号をもつ OD が大部分なのと実に大きな違いである。

論文数や学位取得率が他分野に比べてどの程度見劣りするのかわくは知らないが、生態学、分野では研究の量が論文数につながらないなど、それなりの特質があるはずなのに、何が何でも自分の家の庭は貧弱に見えるようだ。そして氏の価値基準があまりに表面的俗物的なものにはあきれてしまう。博士号をもつかもたぬかなんてことが、どれほど研究者の質に関係するのだろうか。

さらに伊藤氏は「最近まで教育になら関係のないポストにいながらも、日本の生態学の水準の上昇を夢中で追求してきた」そうだが、まるで自分の出世欲や名誉欲は全くないかのごとき書きようである。たしかに彼の主観では民衆の求める生態学の発展の為に尽してきたのだろう。しかし自己の欲望を無意識に押しやり、他のために献身しているという意識で行動する人ほど迷惑な存在はない。そんな人ほどもっと自分は評価されてしかるべきだという不満をもつのが常である。伊藤氏の不満もそこに根ざしているのではなかろうか。

そして次のように結論する。

日本の生態学の発展のために必要なのは、小説家や詩人のことばを引用しての“通”ぶった対話なのではない。もっと調査と実験をやること（教授もやること！）、そしてなにかんづくそれらをすぐ原著論文に書くこと、論文内容を批判しあうこと、そしてそのような動きに“反近代主義”の旗印をかざして水をさす行為を徹底的に批判することである。

ここで反近代主義の旗印をかざして水をさすものとは、我らが会長のごとでしょう。（オレはそんな“旗印”などかざしていない。戦争はきらいだもんね —— 会長）

とにかく伊藤氏の場合は、生態学の発展というのは必要不可欠にして絶対善ということになる。しかし学問の発展とはいったい何なのだろうか。もし生態学が今はやりのバイオテクノロジーなどのように金に結びつくものなら、ほうっておいてもどんどんと表面的な発展をとけるだろうし、また民衆が真に求めるものでありうるならば全く別の形での発展というものがあるはずだ。もし伊藤氏のいうように生態学の地位が低いのなら、生態学自身に原因があるとも考えられるし、それならそれで平和的な学問ということで無理に発展させる必要もなからう。結局のところ伊藤氏のいう生態学の発展とは生態学者の地位向上であり、彼らの価値体系をより絶対化しようとしているのにすぎないのではなかろうか。それは確かに生態学者にとっては大いに意味のあることかもしれない。しかし、さまざまな価値体系とその限界を学びながら自分に合った生き方を見出す時期にある学生までが、そのような価値体系を絶対不変と信じこまされ、その中に自分を位置づけることにしか目が行かなくなるとしたら、その害は大きいと言わなければならない。

< 追 記 > ミヒャエル・エンテ作 「モ モ」 (大島かおり訳・岩波書店)
を読んで

「時間とはすなわち生活なのです。そして生活とは、人間の心の中にあるものなのです。」

人は時間を節約し生産性を上げることに熱中するあまり、生活を貧しいものにしてしまった。そして時間を節約したつもりで実は時間＝生活を失ってしまったことに気付くのがおそろしいから、静寂と退屈に一時たりとも耐えることができない。だから遊ぶときにさえ、仕事の時と同じようにやたらと忙しく遊ぶ。車窓の外を移りゆく美しい風景を愛でることもなく、院生の論文を校訂せざるをえないのである。

この童話の主人公である女の子モモは、時間の国へ行き自分の心の中に次々と咲いては消える時間の花を見る。その花はいつも前に咲いた花よりももっと美しい、考えられる最高の花なのである。時間の花を心の中から失ってしまった人達は、それを物質でおぎなおうとして、駆り立てられるように動きまわって、それでも満たされるといことがない。

時間がすなわち生活であることを、その時その時を最も美しく咲く花のようなものであることをしっかり胸にきざみつけるとき、生きるということが成功や目的とはかかわりのないゆったりとしたものであることが見えてくるような気がする。

なかなかそこまで行かないが。

黄　色　い　糸

小　知　閑　閑

あーあよく寝た。でもまだ少し頭がポーッとしている感じだな。どのくらい寝ていたのかな。外はもう明るいねえ。少し涼しいけど食事はありそうだから、そろそろ起きるとするか。もっと暖かくなったら腹いっぱい食って、それからは生めよ殖やせよだからな。ん？　これは何だ。この前まではなかったはずだぞ。いつの間にこんな糸がおなかにくっついたんだろ。おまけに黄色い色をして。ただくっついているだけかな。う〜ん、こりゃだめだ。引っ張っても痛くはないけど取れそうもないな。くっついているだけじゃないね、これは。おなかの中から生えてる感じだね。おなかでひらひらしてみともないけど、大して邪魔にもならないから気にしないことにするか。取ろうと思ってもとれないんだからしょうがないもんな。

「おや、昨日のやつが部屋に入ってきたぞ。寝ほけた顔をしてもう一人きたぞ。阿保な顔はどっちもどっちだね。」

「もう溶けてるやん。あとはもう増やして送るだけや。見てみい、こうやって光を反射させると黄色いやろ。」

「本当やな。」

「透過光やとちょっと黄色っぽいだけやけど、反射光やと綺麗な黄色に見えるんや。うまくいった証拠や。」

「普通は白く濁っているだけやろ。何んで黄色いんや。」

「合成したポリペプチドやて。おとついのことやけど教授がな、この B. coli と黄色い液の入った試験管をよこして、B. coliにくっつけろと言うんや。方法は例の論文の通りにやればいいんやから簡単なんやけど。昨日1日で終わってしもうた。」

「合成したポリペプチドってどんなんや。」

「オレにもようわからんのや。教授に聞いたんやけど、なんでも外国の古くからの親友てのに頼まれたらしいんや。これを増やしたらそこに送り返すんやて。」

「危ないんか、そんなん。」

「気いつけてやりゃ大丈夫や。もう慣れたもんや、こんなことは。一匹かて逃がさんよ。万一ばれりゃやばいもんな。」

「こんな所でやっちゃまずいんだろ。」

「本当はな。向こうのP4でやるのはめんどろなや、着換えたりせんならんし、実験器具かでそれ専用でせんならんし。今はほとんどあの部屋使えてないんや。どこで実験したって聞かれた時のためにあるようなもんや。ここでやったって、使った実験器具なんかすぐ全部滅菌するさかい大丈夫や。みんなもそうしてるんやし。」

「でもなんでおまえがそんなことせんならんや。教授が頼まれたんやろ、教授が自分でやいやん。」

「教授は自分でもわかってるのや、それこそ危ないわ。手がプルプルや、あらアル中やで。それよりなオレ、教授に就職の世話頼んでるねん。それでな、断わるというわけにもいかぬのや。無能やけど顔の広いのだけが取り得やから、そのうち見つけてくれるやろ。うちの講座だけはオーバードクター様とんどいないやろ。おたくにはいっぱいいるな。」

「ほうや、うちは今8人や。今度の4月からオレが9人目というわけや。そやけどそっちにも1人いるやんけ。」

「先輩は教授と仲が悪いんや、いうこと聞かんさかい。一度けんかしてそれ以来互いに口をきかんのや。それで見せしめに就職の世話せんや、先輩にだけは。それに教授とけんかした院生なんてどこも採らんしな。おとなしいオーバードクターがいっぱいいるんやさかい。」

「しかし頭痛えなあ。」

「どしたんや、さえない顔して。」

「いや昨日な、隣の部屋のやつが彼女に振られた言うてな、付き合うて飲んだんや。それが二人でレッドを30分で開けてもうたれや。飲み終わったとたんに二人共パタンキューや。あいつはまだ寝てるわ。それよりおまえ何時ごろ仕事終るんや。」

「そうやなあ、4時過ぎくらいかな。」

「ほならそれから囲もうぜ。チエリーで4時ごろ待てるわ。」

「じゃ終わったら行くよ。」

「オレはこれから生協で飯食って下宿に帰ってまた寝るよ。じゃあな。」

「はいじゃ後で。」

なんだあいつら、朝から尿ジャンの相談か。それにしてもオレは危険な生きものなんかね。そう言えばオレをえらくていぬいに扱っているね。そんなに恐いのかね。オッ、食い物がいっぱい入って来たぞ。これでしばらく生めよ殖やせよに専念できるというもんだ。適当に暖かいし、腹はいっぱい、まるで天国だねここは。しかしオレの子孫も孫もみんなおなかに黄色い糸をつけてるね。あいつらは生まれた時から糸がついているせいかまったく気にしてないね。かえっておもしろがってるみたいだ。やれ生め、やれ殖やせと、これがおいらの生きがいさ。

「室長、カプセル持って来ました。」

「ご苦労さん、その机の上のピーカー、そう黄色い液の入ってるやつをカプセルに移してくれ。そうしてもう一度持って帰ってほしいんだが。向うに渡せばあとはみんなやってくれることになっているから。」

「わかりました。だけどこれは何ですか。」

「それは日本でつくられたものさ。もう一度今度はロケットで送り返して空から日本中にばらまこうと言うわけさ。これは最重要機密なんだが、明日から君もこの研究室に来るのだから知っておいてもらわなくてはならない。ただし絶対に口外してはならないよ。君も知っていると思うが場合によっては、君自身の命にかかわることでもあるからね。」

「はい、十分承知しています、そのことは。ここに黒っぽい灰色のもありますが。」

「明日説明するつもりだったが、ついでだから今しよう。その一見黄色っぽいのはこうやって光を当てて反射させると、黄色味がうんと深くなるだろう。こっちの灰色の方は光を反射させると、濃い赤紫というかチョコレート色に見えるだろう。どちらも実に神秘的な色合いだ。実はこれは私と所長が共同で開発したものだ。両方とも特殊なアミノ酸配列の合成ポリペプチドを *E. coli* に結合させたものだ。そして黄色いポリペプチドは黄色人種の上皮細胞に特異的親和性を持っている。同様に灰色のはニグロに特異的に結合する。なぜポリペプチドの色が皮膚の色ど一致するのか、まったく不思議な現象だ。そしてこの *E. coli* のゲノムには発ガン遺伝子を活性化する遺伝子を組み込んである。もっとも活性化能の非常に低いやつだがね。空からばらまくと10%程度ガンが増えると言う程度だから、よほど注意深くデータを集めないで統計にもひっかからないね。しかも発ガン遺伝子自体は当人自身のものだし、活性化遺伝子はガンができるまでには消滅している。いくら調べても証拠は何も残っていない。こんなことは夢にも思わないだろうさ、日本では。あの国では特に環境中の発ガン因子が増加しているから、そのせいにされるのがおちだね。」

「しかしなぜ日本に、日本は黄色人種とは言え、友好国ではないですか。軍のことにしたって、軍事費のことにしたって、わが国の言いなりじゃないですか。」

「これは日本を壊滅させるためにやるんじゃない。わが国の利益になるように、日本の経済をコントロールするためにやるのだ。現在、日本の経済力はやや強すぎる。そこでガン患者を多少増やして、それによって経済力を多少消耗させようと言うのだ。医療というのは完全な消費産業だからな。それにわが国からの治療器具や薬品の輸入も増えるだろうし。」

「なるほど、でもなぜこれをわざわざ日本でつくらせたんですか。ここだって簡単に黄色い糸を結合させられたはずなのに。」

「それは全く所長の考えに依るのだ。日本人の作った黄色い糸のついた *E. coli* でこそ日本人をガンにすべきだと言うのだ。恐しい人だよ、所長は。わざわざ秘密のもれる危険を冒すことはないとは私は反対したんだが。もちろん例の日本の教授はわれわれの研究について何も知らない。」

しかしポリペプチドを E. coli に結合する技術自体は公開されているし、どこでも簡単にできるのだ。所長が彼を国際学会の役員に推すことになっているから、何も言わずに喜んで引き受ける

「いないし、危険は何もないと言うのだ。もっともあの教授なら、出世のためなら本当の事を知っていてもやりかねないがね。」

「待ってくださいよ、もしかしたら白い反射光を出すポリペプチドというものもすでに合成されている……………」

「その通りだ、君は仲々感がいいね。この研究所の性質上所員はすべて白人だ。だから黄色とかチョコレート色の E. coli は所内にある限り安全なのだが、白いのは厳重に管理されていてこういう普通の実験室では扱えないのだ。」

「……………」

「当然の事だが、これらのポリペプチドに関する研究は一切公表されていない。これを秘密にする代償として、軍は当時の室長を所長にした。私も室長になれたわけだ。これらのポリペプチドはもちろん非常に強力な武器になり得る。しかし軍が最も欲しがっているもの、そしてわれわれのこれからの研究の目標でもあるものは別にある。それはまだ合成されていないのだから推測に過ぎないが、仮にいうとそれは赤い系だ。赤い人間に特異的親和性を持ったポリペプチドだ。これまでの白、黒、黄、どの人種の場合も、色素細胞だけでなく、体中のすべての細胞が人種特異性を持っている。しかし赤い人間の場合には脳細胞、それも脳細胞自体ではなく、おそらくある神経繊維同士のつながり方に特異性があるのだ。従って赤い系は神経繊維のある特殊なつながり方に反応するポリペプチドでなくてはならない。強力な殺人性の E. coli はすでにたくさん開発されている。それに赤い系を結合させてみ給え、いかに軍が欲しがっているかよくわかるだろう。」

「……………」

「研究の具体的なプランについてはすでに考えてあるから、明日9時に私の部屋に来てくれ給え。この計画が成功すれば私もおそらく、その後君も所長になれるのは間違いない。軍にはそうする必要があるのだからな。さてと、カプセルに入ればその黄色い液は自動的に凍るから、後は頼むよ。それじゃ、明日。」

あ〜あ、また眠らされるのか。

んん？ ここはどこだ。えらくつつるして赤っぽい所だな。あれ、見たことのあるやつが来たぞ。そうだあいつだ、オレに黄色い糸をくっつけたやつだ。それとあの時マージャンに誘われて来たやつだ。二人共長い棒を持っているな。だんだんこっちに来るぞ、いったい何しに来るんだろ。

「おいのどが乾いたな。ちょうどここに真っ赤なトマトが成ってるやん。今年の初物だね、まるで食べてくれっていう感じやで。」

「お前、盗って食う気か。でもだれもおらんしな。」

「一つ二つ取ったってわかりっこないさ、こんなにたくさんあるんやし。」

「それじゃうまそうな所をいただきますか。」

洗いもせんと食って。オレがついているとも知らずに大きな口あけてうまそうに食っとるわい。あーっと、食われた。もぐもぐしながら何やら言ってるな。

「しかし解禁日やいうのにさっぱり釣れんかったな。」

「人が多すぎるわい。なんぼアユが多ても釣ってる人がそれ以上多いんやさかい、しゃない」

「それでもこんだけ釣れたさかい帰って塩焼きで一杯やるか。」

「そうやな。それにしてもこのトマトうまいな。」

人間の腹の中っていろいろな所があるな、酸っぱい所とかにがい所とか。おちおち生めよ殖やせよもできんで、オレの唯一の生きがいなのに。それでもここは割と快適や、食料はあるし、暖かいし。あれは何だ。柔かい棒みたいなものがたくさんうごめいているぞ。段々近づいてくるぞ。何でそんなにくすぐるんだ。しかもおなかばっかし。何回かこれまでもこいつらにくすぐられたことはあるけど、こんなにおなかばっしくすぐられたことはないな。あーあっ。黄色い糸が棒にくっついたかと思ったら、どんどん中に入っていくぞ。それにつながって、光るような糸もオレのおなかから出て、あのぐにやぐにやした棒にはいっていくぞ。とうとう全部入ってしまった。一体、何だったんだろう、あれは。それにしてもさっぱりしたよ。痛くもないしたいしてじゃまにもならなかったけど、やっぱりないに越したことはないな。身軽になった感じだ。でも又眠くなってきたから、もう一眠りするか。

ん？ 急にえらく冷たくなったな。ここは水の中だ。いつの間に出てきたんだろ。オレが寝てる間にあいつ何したんだろ。あいつ、何かヒモを引っぱったぞ。わあー、洪水だあ。助けてくれえ。流されるう。

近 ころ 読 ん だ 本

チ ビ

その1：「大陸と海洋の起原」— 大陸移動説 — ウ”エーゲナー著、都城・紫藤訳、上・下2
巻、岩波文庫青907-1・2。 ¥350+400

ウ”エーゲナーの大陸移動説と聞くと、どんな感じをお持ちになるだろうか。おそらくアフリカと南米の地図を見てハタと思いついた、コートームケイな説というふうに思われるのではないだろうか。そうではないと言われる人は以下を読まれる必要はない。(読む必要はなくても、タイプせんならんところが、会長の辛いところ — 会長 —) 私はつい最近までそのように思っていたのだ。(これはラマルクのことなどとともに教科書的、表面的、ダイジェスト的教育のおかげと、自分の不勉強はうっちゃって、しておこう — これは会長の注ではありません。念のため)

現在はプレート・テクトニクスなるものが大流行だが、どういうわけか私は大流行のものは大キライになってしまうタチらしく、現代的プレート・テクトニクスの本など読む気になれず、ひとつコートームケイ説を読んでやろうと思ったわけだ。

読んでみると、思わくとは大ちがい、これはプレートテクトニクスそのものではないか。(プレート・テクトニクスの本も読まずに、なんで同じやとわかったんや? — これは会長の注) しかも彼の大陸移動説は大変論理的でかつ説得力がある。彼の示す証拠は多くの分野にわたる。大陸間の海岸線の形が良く合う(これは良く知られている事だ — これは原注)。その兩岸の地質学的性質がたいへん似ていて、大陸を合わせると連続する。古生物相が大陸間で同じである。現在の生物相にも大陸を移動させるとつじつまの合う事柄が多くある。古気候も同様。そして実際に測定をすると大陸が動いている!(これはマチガイであったようだ。しかし当時の測定では、動いているという結果が出ていた — これも原注。つまりぬいたずらをしたばかりにひどく面倒なことになってきた)。以上のことを多くの例をあげて示している。

古生物相が各大陸間で良く似ていて、これが過去の各大陸間のつながりの存在を示すもの、ということはウ”エーゲナー以前の人々ももちろん考えていた。しかしそれを大陸間の(現在の大洋の部分に存在した)陸橋、もしくは峽在大陸のせいにしていた。

しかし現在の大洋部分における陸の存在、その沈下による消滅ということはアイソスタシー

といった地球物理学的な事柄とはあい入れない。古生物学的事実と、地球物理学的事実を、いかに一致させるか。大陸を移動させるほかないではないか。

さてさて、訳者の解説（下巻の199ページから249ページまで訳者のシンセツな解説に、ついやされている。ここはぜひ読まれよ）によると、ウエーゲナーが移動説を出版すると、賛否両論というよりは賛成チョピット、反対ホトンドといったところだったらしい。

ウエーゲナーは最初の出版から4回書き改め、その間に出された新たな証拠と考えられるものを取り入れ、より説得力有るものとしようとした。しかしながらホトンド反対という状況は変化せず、ごく一部の人が少しずつ発展させてきたのだが、充分うけ入れられるものとはならなかった。それが近年古磁気学の進展などによって、急激に大陸移動説が復活し、今日のプレート・テクトニクスへと発展したのである。

長い間の拒否と急激なうけ入れということは私にはたいへん奇妙に思える。なぜなら、古磁気学の進展などといっても、ウエーゲナーの示した数多くの証拠にもうひとつの証拠が加わったにすぎないという感じがするからだ。たとえどんなに論理的で説得力があろうとも、大陸がドンブラコ・ドンブラコと大洋を動いていくわけがないという思いこみは、そう簡単には追いつけなかったということを示すものだろうか。それにしても急に追いつきに成功したのはなぜだろう。これがパラダイムの交換とかいうやつだろうか（パラダイムの交換などと言っても何の説明にもなりはしないが）。はてさて？

その2：「悪用される科学」 生越 忠 著、三一書房、¥1400。

著者は地質学者であって、反公害・反権力の立場から、いろんな運動にかかわってきている。本書はそれらのかかわりから実際に接し、対決した御用学者達の実体を事実をもって明らかにする。この中に登場する人物は、著者の専門の関係から地質関係の研究者がほとんどである。彼らはその名前を明らかにして登場し、ちがうものを似ていると言い、そして似ているから同じとすると言い、データをねつ造し、データを隠し、資料を入れかえ、安全値を切り下げ、危険を危険とはいえないと言い、そして安全と言い、断層の距離を半分にも値切り、ろくに調べもせず大丈夫と言う。また、まともな実験もせず、実験をしても都合が悪いとそれを用いず、意味不明の実験をくりかえす。

そんなものじゃないかと思いつつも、この様に、あらためてならべられると、やはりゾッとする。こんな事柄の上に全てが進められていく所かと思うと、とても日本なんぞには住んでられないという気にもなるのだ。（とって、いまさらどっかへいくのも、おっくうだしね 一會長一）

その3：「奇妙な論理 — だまされやすさの研究 —」マーチン・ガードナー著、市場泰男訳、社会思想社（そしおぶっくす） ￥1,500。

っいつい、表題にひかれて買ってしまった。それに著者がマーチン・ガードナー、出版社が社会思想社ときている。手が出ないのが不思議なくらいだ。読んで良かったとまではいかなくても、読んでソンはないだろうと思っていたが大ちがい。こいつは読んでソンをした。（ソンをするのは君の勝手だが、その腹いせにタイプをたたかされる身にもなってみろ — 会長 —）

この本は1952年に出版された "In the Name of Science" 25章のうちの11章を訳したものであるが、何をいまさら、こんなものをわざわざ訳したのかと思えるほどだ。

ガードナーは、主張する本人はこれを科学的と主張し、いわゆる科学者はまゆをひそめる、そんなさまざまな例を紹介し、それに批判を加える。こう書くとけっこうおもしろそうだが、その紹介の仕方、批判の仕方が、まったくフマジメなのだ。キチンと紹介し、その論理のまちがいや事実のまちがいをキチンとかつユーモアをまじえて指適する、というものである事を期待したのだが、まったくちがっていた。ガードナーは既存の科学の、現在科学者と呼ばれる人がよって立つ、そして多くの人々が科学的だと思っている、それを背景に、それによりかかって、尊大な態度で見下しながら述べてゆくのだ。こんなアホなやつがいる。それにまきこまれるこれまたアホなやつがいるのだ、といった調子なのだ。この文章が、あまりにもひどい紹介の仕方だと思われる方は、買って（借りてでも、立ち読みでもけっこうだが）読まれるがよい。読んでソンをしたと思われるであろう。

?!? 会 計 報 告 ?!?

1981年4月 ~ 1982年3月

収 入

1000円会員	7人分	700円
1000円会員	39人分	39000円
2000円会員	5人分	10000円
小 計		49700円
前年度くりこし		99410円
寄 付		5100円
総 計		154210円

支 出

上質紙	12000枚×2円	24000円
表 紙	1400枚×2.5円	3500円
ファクス原紙	60枚×70円	4200円
印刷インキ	3本×900円	2700円
送 料	10、11、12号分	87000円
総 計		121400円

差引くりこし高

32810円

「これは絶対ウソではない」と、あるウソつきじいさんが申しました。

※ 振替用紙に未納会費を記入して同封します。その金額はあくまで本部の記録によるものであり
会員諸氏は自分の信念にしたがって好きなだけ会費を送りたい。

×××× 会長 へ の 手 紙 ××××

科学は、自然を観察することから始まると言われていますが、結果がゆがんでいたら、自然がゆがんでいるか観測でゆがんでしまったかの何れかになります。自然がゆがんでいると考えるのは観測者がゆがんでいるからだ、いつも、言われがちです。そして、人間のつくり出している社会も同様に、観測者がゆがんでいるとゆがんで見えるものだとされます。そんな風潮に慣らされて、このごろ特に、世の中がゆがんで見えるのは高令化に伴う観測眼の衰えに起因するのかと行く末（何れの？）を案じていたものです。

その衰えた眼（それには活字が小さすぎるが）を酷使して、どこからともなく時々手に入る貴会誌を「盗読」していると、なかなか不真面目な論文が多く、わが「正眼」に自信を持つに至りました。そして、不真面目な論文（文）に真面目に反論するには、会費を送らねばいけないのではないかと不真面目に考えたり、会費をおさめると読まなくなるのではないかと真面目におそれたりするようになりました。

そこで、念のためにと、どこかで拾ってきた色の変わった第1号をみましたら、会費がいくらかがわかりません。学長クラスは4000円とありますが、「本来学長クラスのはずなのに下働きさせられている者」はかいてないからです。

やはり、会費を払わずにゴミ箱を探せばよいということになりそうですナ。 (真)

- ※ 会長としゃべっていると、こちらまでだんだんおかしくなってきます。先日もこんなことを言うんです。「日本生物学会もだいぶ大きくなったから、編集局長だけでは足らんなあ。印刷部長とか発送部長なんかつくるか。君、兼任せえよ」「また出世するんですか?」「出世にはならんで。局長の1等級に2等級の部長を2つ足したら5等級になって、平職員に格下げや」「……?」私はこの提案を断固拒否し、あくまで編集局長1本の1等級にとどまることにしました。会員の皆さんの支援をおねがいします。それにしても、会長のところへ学生が来なくなったわけはわかりますね。

- ※ 学生が来なくなった代わりに、教官がよく会長室をおとづれるようになりました。中には会長以上に口の達者な先生もいて、だまたま居合わせると、とんでもないことになります。「会長への手紙」を書いた先生もその1人で、私の顔など見ると、うれしそうな顔をして、たちまちからかい始めます。それにしても、会長の部屋に集まる先生は、何となく主流から落ちこぼれたような人ばかりで、えらい人がちっとも来ないのはどういうわけでしょうか。ああ、先日生物学科の教授が突然乱入してきて、会長がかけているクラシックのテープがやかましいから消せと、どなっていました。その翌日、会長がまたかけているので、「昨日おこられたんとちゃうんですか」ときいたら、「いや、またひっかかるかもしれんから、餌を仕かけてんのや」。この大学はどうなっているんでしょうね。

- ※ 今回はどういうわけか、いろいろな人から沢山原稿が集まりました。まじめなものもあり、ふまじめなものもあり、いろいろです。私はそれをただ並べただけですから、責任は持ちません。原稿が集まったのに発行がおくれたのは、会長が、夏休みにはオレはウツ病になるんや、と称して、タイプ打ちをさぼっていたせいです。せかしたおして、やっと発行までこぎつけました。なお、この号に載せきれなかった投稿も残っていますので、また会長をせかすつもりですが、そろそろ秋休みもはじまりますし、いつになることやら。

日本生物学会誌 第13号 1982年10月1日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載